捕虜たちの声なき声に耳を傾けて

英連邦墓地はいつも深い緑と静寂に包まれていますが、整然と並ぶ 1800 余りの墓碑の１つ１つに様々な生と死のドラマが秘められています。私たちは、遠い異国で無念の死を遂げた捕虜たちの声なき声を聴き取ろうと長年調査をしてきました。今回はその中から３つの話をご紹介します。

（2014.8.2　POW 研究会　田村佳子＆笹本妙子）

■イギリス区 E ブロック B 列 11　KEGGEN, Hubert Stanley　1943 年 11 月 8 日死亡

今年 9 月 5 日、新潟県糸魚川市青海町にあった東京第 13 分所（通称青海収容所）の跡地に、慰霊碑が建立される予定です。ケッゲンは、この収容所で亡くなった 60 人のうちの 1 人でした。

青海収容所は 1943 年 5 月 1 日に開設され、まもなく、シンガポールから移送されたイギリス兵捕虜約 300 人が到着しました。この中にケッゲンもいました。翌 1944 年 4 月にはアメリカ兵約 100 人、さらに 1945 年 5 月にはイギリス兵約 200 人が到着し、計 600 人が収容されました。

捕虜たちは㈱電気化学工業青海工場に雇用され、石灰岩の採石場や溶鉱炉などで働かされました。占領地の収容所や輸送船の悲惨な航海で、既に多くの捕虜が疲弊していましたが、青海での過酷な生活で彼らはますます衰弱し、一時は捕虜の半数が病気で倒れるという事態になりました。しかし収容所長は、自ら病院に出向いて来て、赤痢で血便を垂れている者まで仕事に動員し、脚気で足が腫れ上がって靴が履けない者には下駄を履かせて働かせました。ひどい下痢を繰り返していた捕虜が、厳しい冬の最中ズボンを脱いだままで働くよう命令され、そのために肺炎を起こして数日後に死亡するというケースもありました。こうして終戦までに計 60 人（英 58、米 2）が死亡しました。死因の多くは脚気、胃腸炎、心臓病、栄養失調、肺結核などですが、いずれも過労と栄養失調が根本的な原因でした。

1977 年秋、ケッゲンの娘ジョイス・ホールワースが初来日、青海の収容所跡と横浜の英連邦墓地を訪ねました。私（田村）はその折、偶然墓地でひどく涙にくれる外国人女性を見かけ、見かねて声をかけたのが今に至る交流のご縁となりました。「14 歳の時に別れて以来、30 年振りに父に会えた。と言ってもお墓の中の父だけどね。父の無事帰還を信じて母と戦争を耐えた。が、大勢の帰国者の中に優しかった父の姿は無かった。程なくして戦友だという人が来訪、父の最期の様子を話してくれた。母は取り乱し、その人の連絡先すら失ってしまった。死因は栄養失調だと聞いている（公式記録では急性腸炎）。国にはお墓が無く、この保土ヶ谷のみ。」とまた大量の涙、思わず「私は徒歩５分の所に住んでいる。これからはあなたの代わりに時々墓参してあげましょうか？」その時の彼女の安堵の笑顔が忘れられません。青海で亡くなった捕虜たちの墓碑は A、C、J、L、Q のブロックに散在しています。

■オーストラリア区 A ブロック B 列 15　HANN, Ian Grant　1945 年 2 月 28 日死亡　27 歳

彼は、横浜市鶴見区にあった東京第 14 分所で喉頭気管支肺炎で亡くなりました。この収容所は 1943 年 12 月末に開設されましたが、鶴見区内の 4 ヵ所を転々とし、ハンが収容された 1944 年 9 月頃は平安町にあり、捕虜たちは末広町の東芝工場で働かされていました。

ハンは、オーストラリア NSW 州奥地の牧場地帯で生まれ育った典型的なカントリーボーイで、頑健な体をしていました。戦争が始まると陸軍に入隊し、シンガポールに派遣されましたが、ここが 1942 年 2 月 15 日に陥落したのに伴って日本軍の捕虜となり、チャンギ収容所に収容されました。反骨心旺盛な彼

は女性に変装して脱走を企てたこともありますが、失敗して収容所に連れ戻され、やがて泰緬鉄道に送られました。「枕木１本に死者 1 人」と言われるほどの犠牲者を出し、「死の鉄道」と呼ばれたこの鉄道で、彼もまた数々の苦難を体験しましたが、何とか生き延び、まだ労働に耐え得るとみなされて、さらに日本に送られました。ところが、彼らを乗せた輸送船「楽洋丸」が航海中に米潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没し、多数の捕虜が海の藻屑と消えました。ハンは幸運にも救助され、別の船で再び日本に向かい、鶴見の収容所に収容されたのでした。

しかし、ここでの生活も非常に厳しく、監視員による虐待にも苦しめられました。ハンの仲間で 2011 年に日本を再訪したハロルド・ラムジー氏は「死の鉄道や地獄の航海よりも、日本の収容所生活の方がもっと過酷だった」と語っています。数々の苦難を乗り越えてきた頑健なハンもついに病に倒れ、まともな医療を受けることもできないまま、27 歳の生涯を終えてしまったのです。

ハンの死後、平安町の収容所は 1945 年 4 月 1 日の空襲で破壊され、1 人が死亡しました。残った捕虜たちは東芝工場内に新設された収容所に移されましたが、この収容所も同年 7 月 13 日の空襲で全壊し、30 人もの捕虜が死亡しました。ハンなどそれ以前の死亡者を含めると、終戦までに計 44 人（蘭 32、豪 10、英 2）が亡くなりました。オーストラリア人はオーストラリア区 A ブロックに、イギリス人はイギリス区の Q と L のブロックに眠っています。

■納骨堂の人々～捕虜輸送船の悲劇

日本国内の収容所で死亡した捕虜はおよそ 3 千数百人です。このうち、英、豪、加、NZ、印など英連邦の人々の遺骨は戦後この保土ヶ谷の墓地に集められましたが、アメリカ人やオランダ人の遺骨は、それぞれの母国に持ち帰られました。ところが、納骨堂にはイギリス人の他、英連邦以外のアメリカ人 48 人とオランダ人 21 人も葬られています。なぜでしょうか。

納骨堂に眠る 335 人は、すべて九州の門司港で亡くなった人々です。南方から捕虜を運んだ船は、航海中の劣悪なコンディションと敵軍の攻撃による沈没などで、多数の犠牲者を出し、「地獄船」と呼ばれました。そして、かろうじて日本にたどり着いても、その直前直後に息絶えてしまう人が大勢いました。一度に余りに多くの死者が出たため、彼らは一緒に火葬され、遺骨は門司のお寺の墓地に合葬されて、戦後それを掘り起こしたときには識別できない状態になっていました。納骨堂の 335 人が個別の墓碑を持たず、アメリカ人とオランダ人も一緒に葬られているのはそういう理由からでした。

どの航海も悲惨でしたが、中でもこの納骨堂のアメリカ人が乗った船は連続の悲劇に見舞われました。1944 年 12 月 13 日、彼らは最初「鴨緑丸」という船でフィリピンのマニラを出港しましたが、その直後に米軍機の攻撃を受けて沈没しました。生き残った捕虜たちは陸路別の港に運ばれ、「江の浦丸」「ぶらじる丸」という 2 隻の船に分乗して再び日本に向かいますが、台湾の高雄港で今度は「江の浦丸」が米軍機の攻撃を受けて沈没しました。残った捕虜たちは「ぶらじる丸」でまた日本に向かいましたが、疲弊の極みにあった彼らは、航海中次々に死亡して水葬され、さらに門司に着いた直後にも 48 人が死亡してしまったのです。これらの悲劇を生き延びた捕虜たちも、移送先の収容所でバタバタと死んでいき、マニラを出たとき 1600 人だった捕虜のうち、終戦まで生き残れたのは 300 人前後と言われています。

納骨堂の左の壁に刻まれている人々はイギリス人、右の壁はアメリカ人とオランダ人です。

※捕虜に関する情報は POW 研究会 HP をご覧下さい　http://www.powresearch.jp/jp/index.html